

# ライフストーリー・インタビュー調査による「地方創生」の取り組み

—よそ者だからこそ見えてくる地域の魅力とは？—

赤池慎吾(高知大学次世代地域創造センター)

岩佐光広(高知大学人文社会科学部)

## はじめに

大学と地域とが協働し、観光産業の振興に取り組む「地方創生」実践が増えてきている。観光商品開発やIT技術を活用した案内看板の設置、観光人育成事業、統計分析による経済評価など、観光分野における大学の社会実践の蓄積が進んでいる。日本と台湾における情報や経験を共有することに加え、アフターコロナ時代のインバウンド観光を共に考え、創り出していくことが大切である。

本稿では、「地方創生」に資することが期待される文化庁事業「日本遺産」認定の事例をとりあげる。著者らも当事者として取り組んだ地域ストーリー作成を通して、「地域の魅力とは何か」、「地域の魅力を言語化する」ために大学がどのように関われる可能性があるのかを考察する。なお、本稿は、2021年9月2日、2021年新実践暨臺日大學地方連結與社會實踐國際研討會にて発表した内容を、ニュースレター用に一部修正したものである。

## 1. 背景と目的

日本国高知県は、1955年の人口88万2,683人をピークに緩やかに人口減少が進み、2005年には人口80万人を切り、2020年10月現在、人口69万2,065人(2015年比マイナス5.0%)となっている<sup>1)</sup>。2020年国勢調査の速報値を見ると、高知県は都道府県別人口で三番目に少なく、都道府県別人口減少率で4番目に高くなっており、人口減少の進む日本において、その最先端に位置しているといえる。

山間部を抱える周辺市町村の人口減少は、更に厳しい状況といえる。本研究の対象地である高知市中芸地域(奈半利町、田野町、安田町、北川村、馬路村)は、高知県の県庁所在地である高知市から東へ約50km、自動車ですら約2時間の距離にある(図1)。人口9,805人(2015年比マイナス9.5%)と県平均(2015年比マイナス5.0%)の2倍の速度で人口減少が進んでいる(表1)。これら市町村では、生産年齢人口(15歳以上65歳未満)の減少による労働力不足や経済規模の縮小、高齢者人口(65歳以上)の増加による医療費・介護費の増大、さらには域内の生活関連サービスの縮小や税収減による行政サービス水準の低下が危惧されている。また、資源・環境面に着目すると、農地や森林等の担い手不足による管理放棄が課題としてあげられる。

筆者らは、毎年約2%の人口が減少している中芸地域と関わる中で、地域社会の文化的要素である「地域の記憶」の喪失に課題意識を持ち、ライフストーリー・インタビューという社会学的手法を採用し、人々の「記憶」にのみ留められている生活の実践経験の記録を開始した。本調査は、「森林鉄道があった時代」と、そこから「森林鉄道がなくなった時代」への変化の態様を人々の「語り」から解明しようとするものである。地元「中芸地区森林鉄道遺産を保存・活用する会」の協力を得てリスト化したインタビューイは、いずれも中芸地域で生まれ、暮らしてきた人々である。現在までに中芸

地域に居住する約 70 名に対面インタビューを行っている。平均年齢は約 81 歳である<sup>2)</sup>。地域住民の暮らしをライフヒストリー（物語り）として捉えるこの手法は、地域ストーリー（地域の物語り）を作り上げる上で非常に参考になった。

そのなかでも本稿で着目したいのは、地域の歴史的文化的な資源を活用して、「地方創生」に取り組む住民活動についてである。2017 年度、中芸地域から文化庁に申請された「日本遺産」の活動を事例としてとりあげながら、地域住民らが地域の魅力を掘り起こし・可視化するプロセスを通して地域社会にどのような変化をもたらしたのか、筆者らも大学連携で参画する「当事者の視点から」考察してみたい。

## 2. 地域ストーリー作成プロセス

筆者らは、2015 年 12 月より、中芸地域でのライフヒストリー・インタビュー調査を開始し、地域との信頼関係を構築してきた。この中で、2016 年に入り、地元有志を中心に文化庁「日本遺産」申請の企画が立ち上がった。著者らは学識経験者として本企画に参画し、「日本遺産」申請の核をなすストーリー作成を担当した。2016 年 6 月から同年 12 月にかけて、計 8 回ストーリー作成のための住民ワークショップを開催した。また、延べ 4 回の文化庁相談会に参加し、ストーリーの磨き上げを行った。

高知県中芸地域の経験を踏まえ、地域資源を活用した「地方創生」に取り組む台湾の住民や研究者らとの情報共有につなげたい。

## 3. 中芸地域における地域資源とその捉え方

ここでは、「日本遺産」申請以前、地域住民が地域資源をどのように捉えていたのかを紹介しておきたい。地域を代表する地域資源として、「魚梁瀬森林鉄道」と「ゆず」があげられる。「日本遺産」申請以前は、両者は関連することなく、別々に地域の魅力として語られていた。

### 3.1. 魚梁瀬森林鉄道（やなせしんりんてつどう）

中芸地域は四国で数少ないスギ天然生林が分布し、魚梁瀬スギをはじめとする優良な天然林を誇る、日本を代表する林業地である。

魚梁瀬林業の隆盛と繁栄を象徴する「モノ」（のちの文化財）が魚梁瀬森林鉄道である（図 2）。魚梁瀬森林鉄道は、1907 年に安田川山線に最初に軌道が開設されたことを皮切りに、1919 年シエイ式蒸気機関車が導入され、当地における動力運材が本格化した。1942 年には、支線を含めた総延長が約 250km に達し、国内屈指の森林鉄道網が完成した。森林鉄道は木材の輸送のみならず、地域唯一の交通機関として住民の移動や商品輸送など中芸地域の暮らしを支え続けた<sup>4)</sup>。昭和 30 年代に入ると、上流に魚梁瀬ダム建設事業が計画され、1957 年に森林鉄道の廃止が決定した。翌 1958 年には奈半利川線の軌道撤去が始まり、1963 年に安田川線の軌道撤去がなされると、同年には魚梁瀬森林鉄道はその使命を終え廃線となった。

森林及び林業、そして森林鉄道は中芸地域の歴史を語る上で欠かすことのできない史実であり、と同時に、地域住民の地域アイデンティティーの一つとなっている。とりわけ森林鉄道に関しては、「中芸地区森林鉄道遺産を保存・活用する会」や各町村教育委員会の努力により、2009 年に魚梁瀬森林鉄道遺産 9 件が近代化産業遺産群（経済産業省）、同年には魚梁瀬森林鉄道施設等計 18 件が国の重要文化財の指定を受けている。

## 3.2. ゆず（柚子）

はじめに、日本で一般的に「ゆず」と呼ばれる農作物は、台湾における「柚子」ではなく「香橙」を指す。本稿では、ひらがなで「ゆず」と表記することとする。

中芸地域の基幹産業は農業であり、海岸沿いの平野には県内屈指の施設園芸(ナス、ピーマン)が展開されている。山側には、稲作のほか夏期にはオクラ栽培、秋季にはゆず収穫が最盛期を迎える(図3)。とりわけ、当地域は、栽培面積約200ha、生産者約1,000人を数える日本一のゆず産地である。馬路村、北川村にはゆず搾汁工場と加工工場が立地し、搾汁液を加工した様々なゆず製品(飲料、ゆずポン酢、化粧品、菓子等)が製造・出荷され、全国から好評を得ている<sup>5)</sup>。

高知県におけるゆず収穫量のシェアは、2000年以降およそ30%前後で推移している。全国における高知県ゆず収穫量のシェアがおよそ50%であることを踏まえると、中芸地域の全国シェアはおよそ15%前後だと推察される。現在では、フランスやアメリカなど、海外にもゆず果汁が輸出されている。

## 4. 「日本遺産」申請にみる地域ストーリー作成

### 4.1. 文化庁「日本遺産」とは

「日本遺産」とは、地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産審査委員会」の審査を経て、文化庁が認定するものである。「日本遺産」に認定されると、当該地域の知名度が高まるとともに、地域住民のアイデンティティの再確認や地域のブランド化に貢献し、ひいては地方創生に資することが期待されている。「日本遺産」として認定されるストーリーは、①歴史的経緯や地域の風土に根ざし世代を超えて受け継がれている伝承や風習を踏まえること、②地域の魅力として発信する明確なテーマを設定の上、地域に根ざして継承・保存がされている文化財が据えられていること、③単に地域の歴史や文化財の価値を説明するだけになっていないこと、が条件となる<sup>6)</sup>。

2020年度末現在、104件(応募総数446件)の認定状況となっており、認定されるのは容易ではない。中芸地域のゆずと森林鉄道日本遺産は、2017年度に認定を受けた。

### 4.2. 住民ワークショップを通じたストーリー作成経緯

紙幅の都合で詳細は割愛するが、毎月、文化庁の相談会に参加し、また協議会での話し合いを繰り返しながら中芸地域のストーリーを練り上げていった。ストーリー作成の経緯を振り返ってみたい(図4)。

第1回文化庁相談会に持ち込んだタイトルは、「環と和：魚梁瀬森林鉄道の環状線路が生み出した杣夫の文化と町民文化の調和」である。森林鉄道のあった暮らしをストーリーの核にして、魚梁瀬林業により隆盛を極めた上流の杣夫文化と製材業や海運業により繁栄した下流の町民文化とが森林鉄道により融合したというストーリーである。このストーリーに対して、文化庁からは、タイトルに「地域の魅力」が表現されていない、杣夫文化や町民文化は他地域と何が違うのか、地域外の人が訪れたいと思うタイトルになっているか、という指摘を受けた。ここでいう「地域の魅力」とは、地域外の人々が訪問したいと思う五感で体験できるモノ・コトを指す。歴史の説明ではなく、今何が体験できるのかがストーリーを考える上で重要になることがわかった。

上記の指摘を受け、第2回文化庁相談会には、「まぼろしの魚梁瀬森林鉄道で巡る海・山・川の暮らしにちりばめられた南国土佐のおきゃく文化」ほか協議会で公募した計9本のストーリーを持参した。文化庁からは、第一回相談会での指摘と同様に「地域の魅力」が伝わらない、まぼろしといった抽象的な言葉ではなく、何を体験できるかを記載すること、等の指摘を受けた。

第3回文化庁相談会には、前回文化庁の評判が良かった「ゆず」や「おきゃく」を組み込んだ「客人をもてなす「おきゃく」の文化：魚梁瀬森林鉄道を巡る交流が育んだ中芸の饗宴の作法」を持ち込んだ。文化庁からは、「おきゃく」(宴席・饗宴)が地域にとって大切なことは十分理解した。しかし、地域外の人が飛び込みで参加できるものではない。また、「おきゃく」は高知県に根ざした文化・風習であり、中芸地域だけで行われているわけではない。ストーリーを考える上で、隣接する安芸市や室戸市とも違った中芸地域にしかないストーリーの作成が求められた。

今振り返ってみると、第3回文化庁相談会の指摘は、中芸地域の魅力をもう一度考え直す契機になったと感じている。協議会では、中芸地域の歴史・文化を「地域外の目線」も入れて考え直すことにした。

「地域外の目線」とは、住民が気付いていないモノやコトをよそ者が発見するというだけではない。住民（地域内の目線）は、希少性、愛着、文化財指定など価値付けされたモノやコトを地域の魅力として説明する傾向にある。一方、その地域をよく知らないよそ者（地域外の目線）は、どうしたら地域の魅力を体験できるのかを重視する。そして、「日本遺産」認定に求められるのは、五感で体験できるモノやコトを「地域の魅力」と捉え、それをどのように体験できるかを言語化するのが地域ストーリーであることを理解した。

林業からゆずに移り変わってきた産業変遷に焦点を当て、それぞれの産業を別々に発信するのではなく、産業が変化するなかで営まれてきた人々の暮らしをテーマに据えることにした。そして、林業からゆず産業に変遷した地域でしか体験できないコトやモノを地域の魅力と表現することにしたのである。こうして、かつて森林鉄道によって木材が運ばれたレール跡を、現在はゆずを満載したトラックが走っている地域のあたりまえを再認識し、「森林鉄道から日本一のゆずロードへ」というコンセプトが生まれたのである。ストーリーの作成に当たっては、ゆず関連産業の協力を得ることができたことも、大きな後押しとなった。そして、第4回文化庁相談会に持ち込んだ「りんてつの里からユズの町へ：日本一のユズと魚梁瀬森林鉄道遺構が織り成す中芸の歴史・景観・文化」で、「日本遺産」申請の方向性が固まった。

その後、協議会での磨き上げを行い、協議会の承認を経て、2017年1月に「森林鉄道から日本一のゆずロードへ：ゆずが香り彩る南国土佐・中芸地域の景観と食文化」というタイトルで文化庁へ申請を行った。申請から3ヶ月がたった2017年4月28日に単独では四国初となる「日本遺産」認定を受けることができた。「日本遺産」認定後の現在、五感で体験できるゆずロードをテーマにして、五感を満たされる体験や仕組み作りに取り組んでいる<sup>7)</sup>。

## 5. 考察

最後に、「日本遺産」認定を通して筆者が感じた「地域の魅力とは何か?」、「地域の魅力を言語化する」ための地域ストーリー作成について振り返ってみたい。

「日本遺産」では、地域外の人が訪問したいと思える五感で体験できるモノやコトを「地域の魅力」と捉え、それを抽象的な言葉ではなく、どのように体験できるのかを言語化したものが「地域ストーリー」である。その際、隣接する地域や高知県との違いを明確に提示する必要がある。

住民とのワークショップの過程では、地域には様々な地域資源があるが、そのいずれか単体では地域全体の魅力とはいえない。例えば、「森林鉄道に歴史的価値がある」や「ゆずや郷土料理がある」だけでは、地域の魅力の一つではあるが地域全体の魅力として明確なテーマにはならないということである。

さらに、地域外の人やその地域を知らない人にとって、地域を訪問したくなるような表現（言語化）の仕方が必要である。また、特定地域の範囲の魅力を考えるのであれば、県や近隣市町村との違いを明確にしなければならない。中芸地域では、高知県や隣接する安芸市・室戸市との違いを明確にすることに苦労した。ゆず栽培の盛んな安芸市とも違い、漁業で栄えた室戸市とも違う中芸地域の魅力を表現する必要があった。くわえて、過去の歴史や文化に固執することなく、「今、地域で体験できる魅力」を表現することの難しさを学んだ。ストーリー作成当初のような「魚梁瀬森林鉄道はすごかった」や「ゆずの生産量が多い」という表現では、過去を賛美するだけの説明に終始してしまう。過去の歴史を踏まえ、今、体験できる地域の魅力を考えて形にするプロセスを住民と共に歩むことこそが、地域活性化の第一歩になるだろう。

最後に、大学生や教員は、単に知識や技術を有しているだけではなく、「地域の魅力とは何か？」への気づきや、「地域の魅力を言語化する」ために必要な外部者としての視点を自らが有していることを自覚することが大切である。そして、地域住民との協働において、外部者の視点を上手く地域に還元することで、魅力的な地域ストーリー作成に大学が貢献できると考えている。

#### 引用・参考文献

1. 高知県（2021）「令和2年国勢調査 高知県の人口速報集計結果」高知県総務部統計分析課  
[https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/111901/files/2011102700109/file\\_20214224193514\\_1.pdf](https://www.pref.kochi.lg.jp/soshiki/111901/files/2011102700109/file_20214224193514_1.pdf)
2. 赤池慎吾・岩佐光広（2018）『平成29年度中芸のゆずと森林鉄道日本遺産研究報告書』高知大学次世代地域創造センター
3. 高知大学の地域貢献については、下記を参照ください（中国語）。  
「衝破高教紅海 日本大學地方蹲點」『CSR@天下』（2018）<https://csr.cw.com.tw/article/40466>
4. 下記より魚梁瀬森林鉄道の映像がご覧いただけます。  
<https://www.youtube.com/watch?v=ZgAbQJV70p0>
5. 中芸地域のゆずについては、下記をご参照ください（中国語）。  
<https://www.newsmarket.com.tw/blog/150879/?fbclid=IwAR2wNzbTerS9zsJrvXtBfsftJ9xmwa2XlvpxPkIxly-9oQE0SfOY8rWdSqE>
6. 文化庁 HP「日本遺産(Japan Heritage)について」  
[https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon\\_isan/index.html](https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkazai/nihon_isan/index.html)
7. 中芸のゆずと森林鉄道日本遺産協議会 HP  
<http://yuzuroad.jp/index.html>

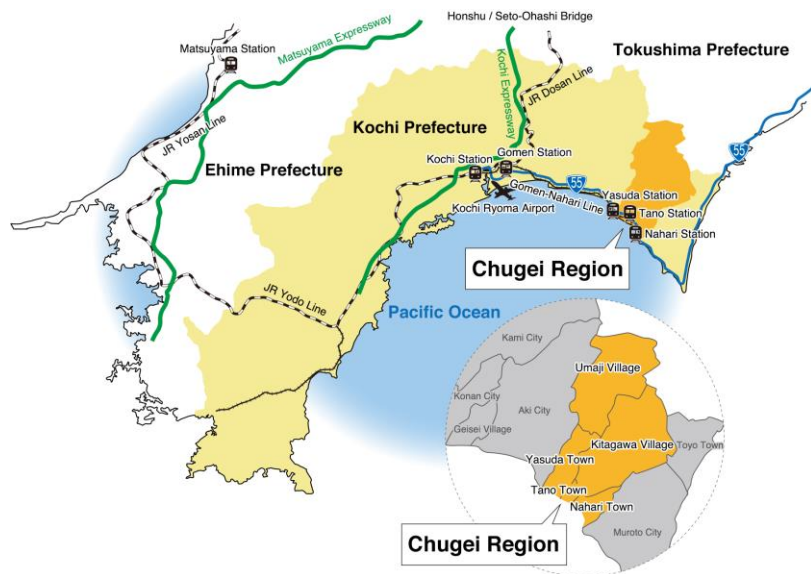


図1 中芸地域の位置

出典: 中芸のゆずと森林鉄道日本遺産協議会 HP

表1 高知県中芸地域の人口動態(2015年~2020年)

市町村	人口総数 (2015年10月)	人口総数 (2020年10月)	人口増減数 (2015年~2020年比)	人口増減率 (2015年~2020年比)
奈半利町	3,326	3,036	-290	-8.7
田野町	2,733	2,498	-235	-8.6
安田町	2,631	2,373	-258	-9.8
北川村	1,294	1,146	-148	-11.4
馬路村	823	747	-76	-9.2
計	10,807	9,800	-1,007	-9.54

出典: 高知県(2021)「令和2年国勢調査 高知県の人口速報集計結果」、高知県総務部統計分析課

URL: [https://www.pref.kochi.jp/soshiki/111901/files/2011102700109/file\\_20214224193514\\_1.pdf](https://www.pref.kochi.jp/soshiki/111901/files/2011102700109/file_20214224193514_1.pdf)



図2 魚梁瀬森林鉄道

出典：寺田正（1991）『寺田正写真集 林鉄』寺田正写真集刊行会



図3 ゆずの収穫風景

出典：筆者撮影



図4 学生も参加しての住民ワークショップの様子

出典：筆者撮影

以上

